

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

皮膚科の臨床 (1994.04) 36巻4号:542～543.

背部にも色素斑を伴った遅発性両側性太田母斑様色素斑の1例

梶田哲, 高木章好, 飯塚一

## Mini Report

# 背部にも色素斑を伴った遅発性両側性太田母斑様色素斑の1例

梶田 哲\* 高木 章好\* 飯塚 一\*\*

症 例 71歳, 男性

初 診 1991年5月24日

主 訴 背部および額の色素斑

家族歴・既往歴 特記すべきことなし。

**現病歴** 初診の約4年前, 家族に上背部の色素斑を指摘された。自覚症状もないため放置していたところ, 徐々に増加してきたため当院を受診した。額両端部の色素斑も同じ頃から出現してきたという。

**初診時現症** 肩甲骨部から下背部にかけて, ほぼ対称性に灰褐色の色素斑を認める。個々の色素斑は, 境界明瞭で直径1cmまでの円形ないし類円形を示し, 一部融合している(図1-a)。また, 額両端部にも直径5mmまでの, 背部よりも褐青色調の強い色素斑が存在する(図1-b)。球結膜・口腔粘膜には色素斑を認めない。

**病理組織学的所見** 左前頭部, 左肩甲骨部の2カ所から生検した。両者の所見は同様で, 真皮上層から中層にかけて, 褐色顆粒を有するひも状ないし紡錘形の細胞が散在し, また Masson-Fontana 染色では色素顆粒は黒色に染色された。

**電子顕微鏡的所見** 樹枝状の胞体内に種々のステージのメラノソームが分布し, 一部では胞体のまわりに extracellular sheath (ECS) を認める(図2)。

以上の所見から, 自験例の色素斑は真皮メラノサイトによるものと考えた。

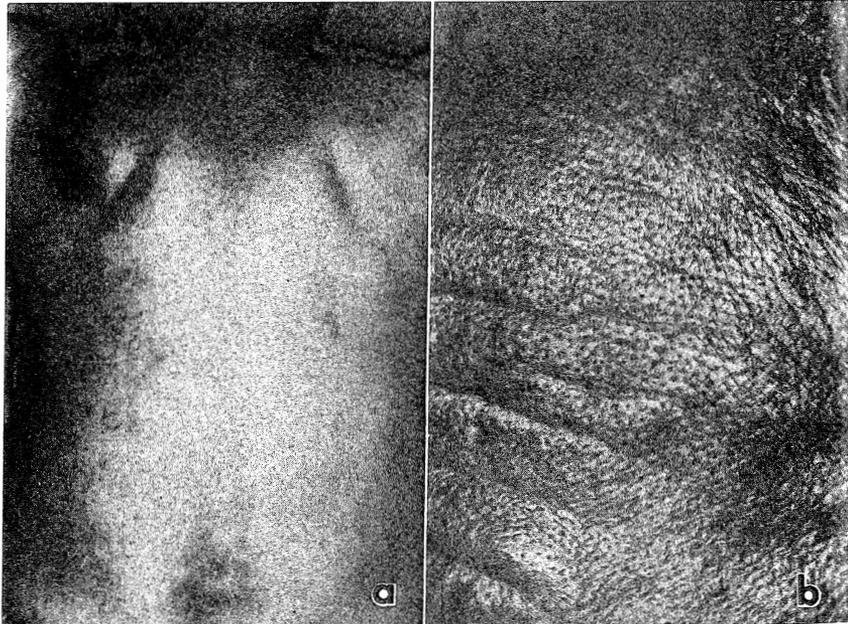


図1 初診時臨床像

## § 考 案

自験例における顔面の色素斑は, 臨床的には Horiらの遅発性両側性太田母斑様色素斑<sup>1)</sup>, あるいは肥田野・金子の顔面对称性後天性真皮メラノサイトーシス<sup>2)3)</sup>とよばれる像に合致する。これらは通常の太田母斑と異なり, 中高年に対称性に発症し, 女性に多く, 粘膜疹が少ないなどの特徴がある。男性では女性と比べさらに遅れて発症し, 額両端部が好発部位とされる<sup>3)</sup>。自験例もこれに合致している。しばしば皮疹は顔面のみならず四肢, 体幹にもみられ, 金子<sup>3)</sup>は四肢に, 小野ら<sup>4)</sup>は体幹・両上肢に真皮メラノサイトによる色素斑を伴う症例を報告している。一方 Ono ら<sup>5)</sup>は上背部にのみ色素斑が局限した7症例を報告し, Late Onset Dermal Melanocytosis; An Upper Back Variant と呼称しているが, うち2症例では遅発性両側性太田母斑様色素斑の併発を認めている。最近, 遅発性両側

\* Satoshi KAJITA & Akiyoshi TAKAGI, 帯広市, 高木皮膚科

\*\* Hajime IIZUKA, 旭川医科大学, 皮膚科学教室, 教授  
〔別刷請求先〕 梶田 哲: 医療法人社団 高木皮膚科診療所 (〒080 帯広市西3条南4丁目16番地)

性太田母斑様色素斑の検討が亀山ら<sup>6)</sup>によりなされているが、自験例とほぼ同様に両側肩甲骨部、上背部に色素斑を伴う症例を含んでおり、前者を両側性伊藤母斑、後者を異所性青褐色母斑と診断している。

限局性真皮メラノサイトーシスのうち、先天性母斑性性格の強いものは遅くとも思春期までに発症し、これらは出現部位により診断がなされ、好発部位以外は異所性として表現されている。一方、遅発性のものとくに発症部位が顔以外のものは診断名が必ずしも確定しておらず、いろいろな名称で報告がなされているのが現状である。

自験例については Hori ら<sup>1)</sup>の病名に従い表題のように報告したが、背部の皮疹も一括して後天性真皮メラノサイトーシスとすべきかもしれない。本病態の発症要因として Hori ら<sup>1)</sup>は潜在性の真皮メラノサイトの活性化をあげている。蒙古斑の消失した後も真皮メラノサイトが残存すること<sup>7)</sup>、ある種の oncogene が真皮メラノサイトの活性化あるいは出現に関与していること<sup>8)</sup>など、それを支持する所見と考えられる。

(1993年6月24日受理)

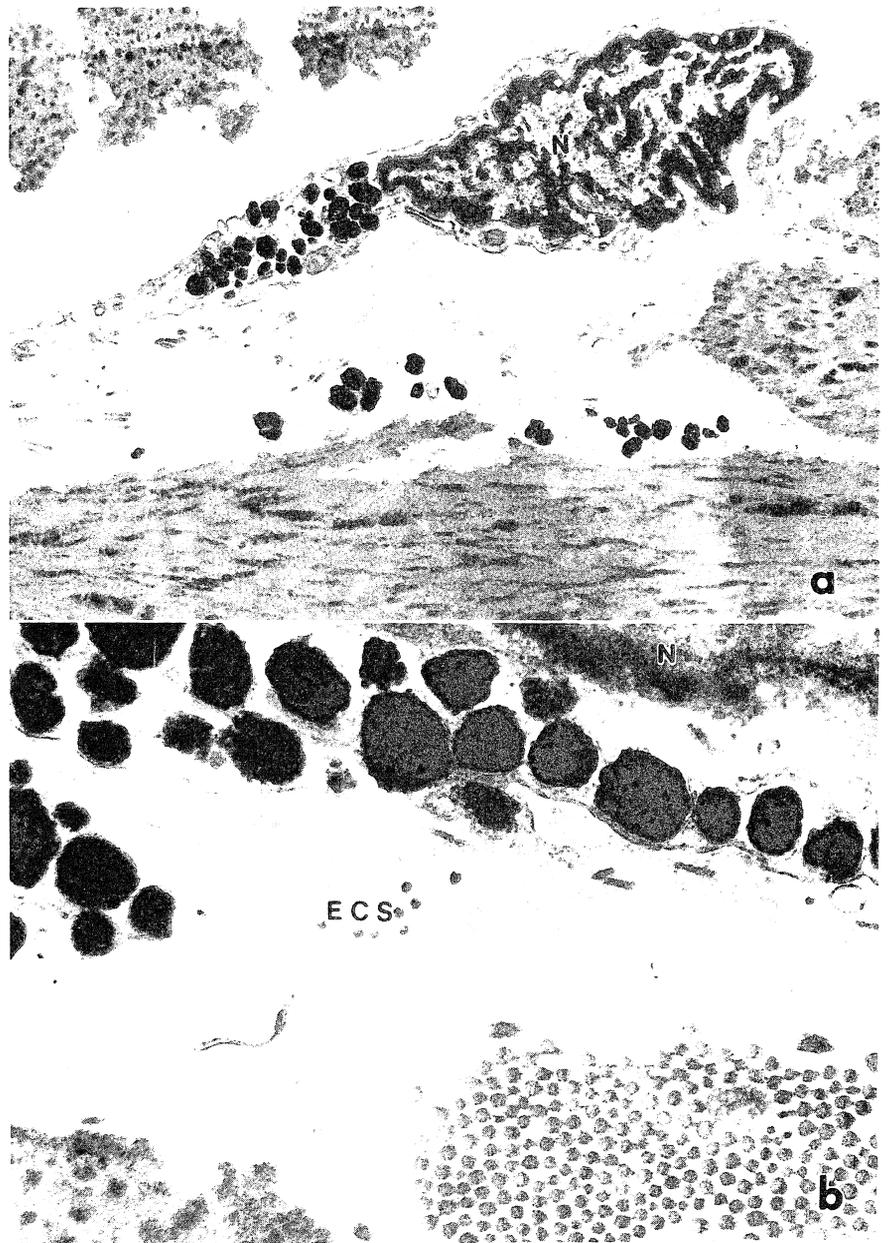


図2 電子顕微鏡像

#### ←文 献→

- 1) Hori Y et al: J Am Acad Dermatol, **10**:961-964, 1984
- 2) 肥田野 信: 皮膚, **31**:771-777, 1989
- 3) 金子佳世子: 皮膚臨床, **30**:1649-1659, 1988
- 4) 小野早苗ほか: 日皮会誌, **101**:965-971, 1991
- 5) Ono T et al: J Dermatol (Tokyo), **18**:97-103, 1991
- 6) 亀山孝一郎ほか: 西日皮膚, **55**:13-17, 1993
- 7) Kikuchi I: Int J Dermatol, **21**:131-133, 1982